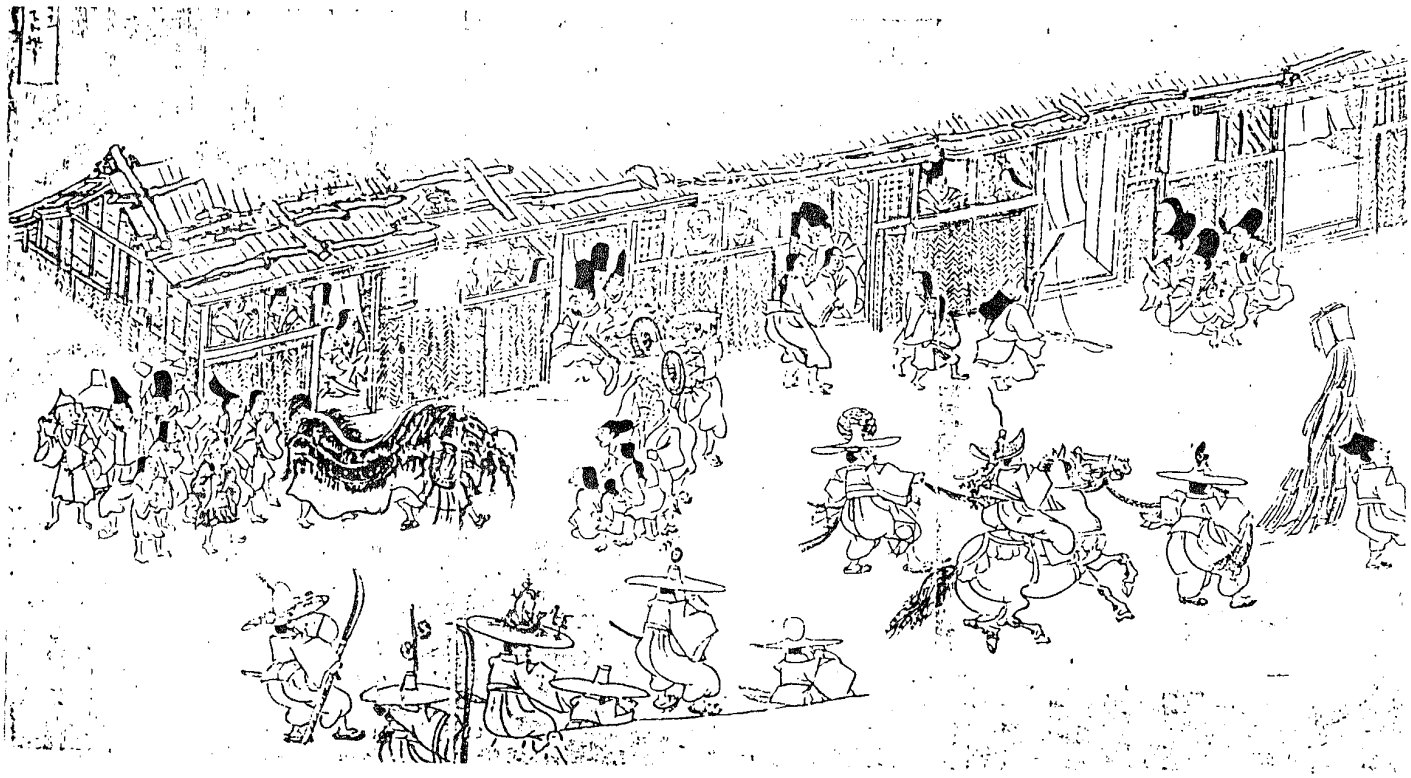
八 条 院 町 跡

（平安京左京八条三坊十四町）

発掘調査現地説明会資料



（年中行事絵巻から）

1996年4月7日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

今回の調査のあらまし

調査の場所　京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町

調査の期間　1996年１月８日～現在継続中　調査面積800㎡

調査の主体　(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査の目的　今回の調査にあたって、私たちは次の点に注意しながら調査を進めました。第１点は、平安京の東南部一帯がどのように変わっていったか。第２点は、この辺りの町の中がどのように利用されているかです。

◎　平安京の大きさと町わり

平安京は今から1200年前に造られた日本の都で、大きさは東西約4.6km・南北約5.2kmです。中央北部には平安宮（東西約1.1km、南北約1.3km）があり、朱雀大路（幅72m）の東側が左京、西側が右京と呼ばれていました。京は東西・南北に交差する大路（幅24m）と小路（幅10m）によって碁盤目に区画され、１区画は「町」(120m四方）と呼ばれ、住居表示は「○条○坊○町」となっていました。さらに、１町は東西に４列、南北に８分割し（四行八門制）、その１つを「１戸主」（間口15m、奥行き30m）といい、庶民の宅地の基本となっていました。

◎　この地域の歴史

この地域は平安時代後期から開発され、平頼盛や藤原顕秀の邸宅、その後美福門院（鳥羽天皇中宮）の御所などが造られました。平安時代末期にはこれらの土地・邸宅などが、美福門院の娘である八条院暲子内親王に伝えられました。この八条院領は御所・院庁（中心建物）・御倉（年貢や宝物を入れた倉）などの建物や関連する邸宅が軒を並べ、十四町には御倉があったことが知られています。鎌倉時代にはこの大規模な八条院もしだいに荒れて、正和２年（1313）には後宇多法皇により東寺に寄付され、東寺領八条院町と呼ばれました。

八条院町は下京の中でも最も南に位置した商工業を中心とした町です。住民には、農民や東寺で働く人々をはじめとして、番匠（大工）・薄屋（金箔関係の職人）・宛屋（椀関係）・丹屋（赤土関係）・金屋（金属加工の職人）・塗師（漆塗り職人）などの手工業者、豆腐屋・紺屋（染め物関係）・桧皮屋（屋根関係）・笠屋・紙屋・筆屋などの店があったり、様々な職業の人々が住んでいました。この町は東寺の重要な庄園として、室町時代前期まで栄えていました。その後町はしだいにさびれて農村化し、安土桃山時代には豊臣秀吉によって南側に土塁（御土居）が造られますが、畑や水田のままでした。明治10年に七条停車場（現京都駅）ができるまで開発を受けていませんでした。

◎　調査地のようす

調査地は、左京八条三坊十四町にあたり、北を八条坊門小路（現塩小路の南側の通り）、東を東洞院大路（現在と同じ）、西を烏丸小路（現在と同じ）、南を梅小路（京都駅１番ホームあたり）に囲まれた町で、調査区はその北東部にあります。調査区は後の世に壊されていないため、鎌倉時代前期から室町時代前期（南北朝頃）まで、約百年間の生活の跡（遺構）が良く残っていました。

調査区では南西部で逆Ｌ字形の溝（溝２）を発見し、この溝の北側や東側では柱穴や井戸やゴミ捨て穴（土壙）などがたくさん発見されましたが、溝の南西部ではわずかでした。調査区北部・東部はさらに南北溝（溝１）・南北柵（柵１）や、東西柵（柵２・３・４）・東西溝（溝４）などによって区切られていました。

調査区の北側から東側にかけて数多くの柱穴を発見しました。柱穴は小さく、柱は丸や角（直径20cm程度）です。建物は比較的小さく、縦２間（柱と柱の間が二つ）・横１間や、１間・１間のもので、柱の間隔は1.5～2.0mと狭くなっています。柱穴は２回か３回重なっており、短かい間に建て替えられています。建物は通りに面して並んでいた町屋の後ろ側の建物群と考えられ、雑舎や付属屋などと推定できます。

井戸は調査区全域で20基発見し、東洞院大路から約12m、八条坊門小路から14m入ったところに集中しています。これらの井戸も作り替えられています。構造は石組のもの・板を九角形や４角形に組み合わせたもの円形の桶を据えたもの・曲物を積み重ねたものなどがあります。深さは１m前後です。

土壙は調査区全域で発見し、色々な生活の道具（遺物）が出てきました。調査区中央部で発見した土壙（土壙１～９、一辺１m前後・深さ0.3～0.5m）では、土師器や漆器や箸などを大量に発見し、土師器皿だけのもの、土師器と箸のもの、漆器と箸・土師器のものなどがあります。

その他、土壙に曲物を据えた遺構（水溜め）、土壙の周囲に施設のある縦穴状遺構（地下室？）、円形や長方形で素掘りの便所と考えられる遺構などがあります。

◎　住民のくらし

建物は、地面に穴を掘って柱を建てる「掘立柱建物」で、瓦は見つかっておらず屋根は板などでした。建物の中は仕切りが無く、板の間や土間に分かれ、寝る場所や家事をする場所や仕事をする場所などを決めて生活していたのでしょう。また簡単な棚などの家具が置かれていたものと考えられます。

町屋裏側の土壙・井戸・溝などに捨てられていた様々な道具には、容器の他に、下駄・柿経（薄板に書いたお経）・砥石・硯・銭などがあり、庶民の生活をうかがうことができます。容器には、赤くて軟らかい土師器・黒色の瓦器・灰色で硬い陶器・漆塗りの器・

曲物などが使われていました。中国から輸入された陶器や青磁・白磁などの器はあまり出土していません。食卓にならぶ椀・皿や壷などの他に、穀物や飲物などを貯える甕、煮炊き用の鍋、調理用のすり鉢などがあります。食器は土師器の皿が中心で、木製のお盆（折敷）にならべ、箸を使っていました。食事は品数が少なく質素で、主食は米でおかずは魚・貝・野菜・山鳥などと考えられます。

◎　町のようすと生活

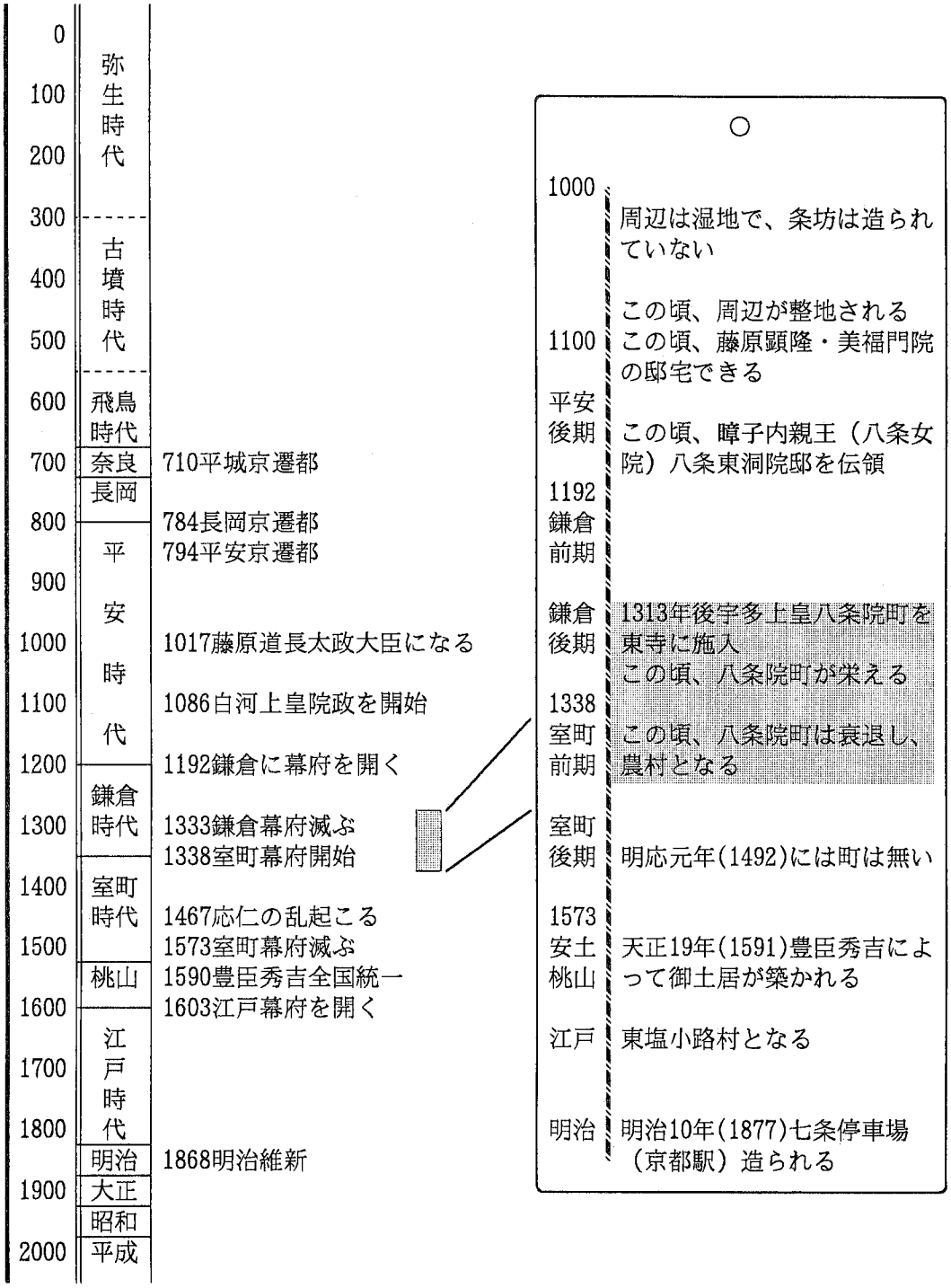
この地域は平安時代後期以前には湿地で、条や坊の道路は造られていませんでした。後期になると大きな規模の整地をしていますが、今回の調査では八条院御倉の跡は発見できませんでした。

今回の調査の大きな成果としては、八条院町内の十四町の町屋のようすがよくわかりました。町内は、東洞院大路に面しては横方向に、八条坊門小路に面しては縦方向に柵や溝で場所を区切り、その中に建物が作られ、裏側には井戸・土壙・便所などがありました。町の中心は溝によって仕切られ空間地となり、畠や作業場・物干し場など共有地として利用されていたと考えられます。

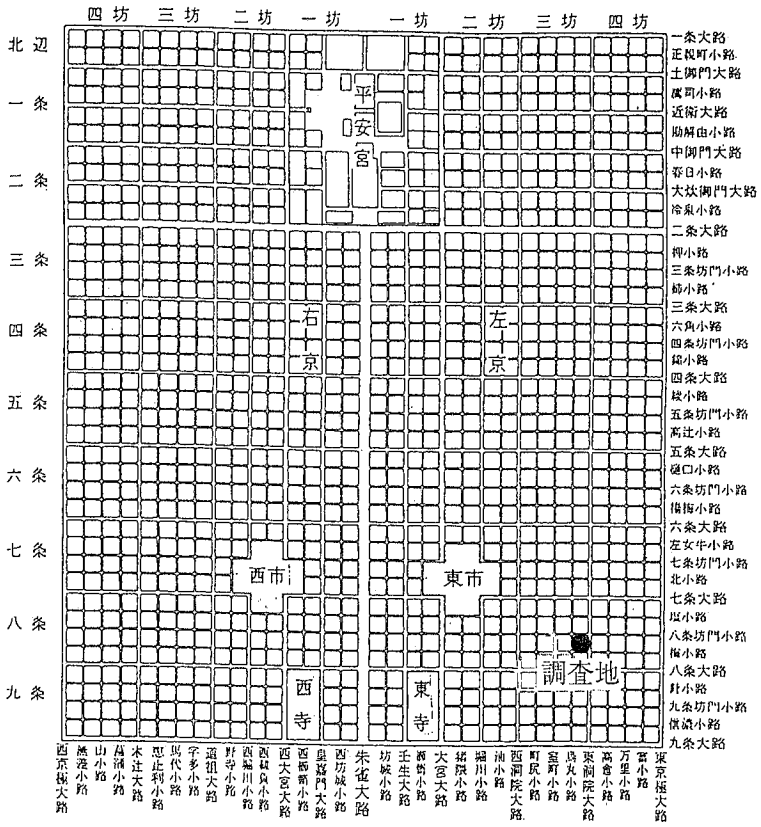
１軒の町屋の大きさは、間口（前面の幅）が７～12mと狭く、奥に20m前後と長いもので（面積200㎡前後）、「うなぎの寝床」と呼ばれるようすがわかります。この地域の町屋の区画の溝や柵は、平安時代の「四行八門制」と言う土地区画によく合っており、中世の町屋の構造を考える上で貴重な発見となりました。東寺がこの町から年貢を取るための帳簿には、町の四周に町屋があり一辺に20軒前後建ち並んでいるようすが描かれていますが、今回の調査でそのようすを裏付けることができました。東洞院大路や八条坊門小路に面した町屋の住人の名前はわかっており、発見された町割りと合わせると、今後色々なことが明らかとなります。

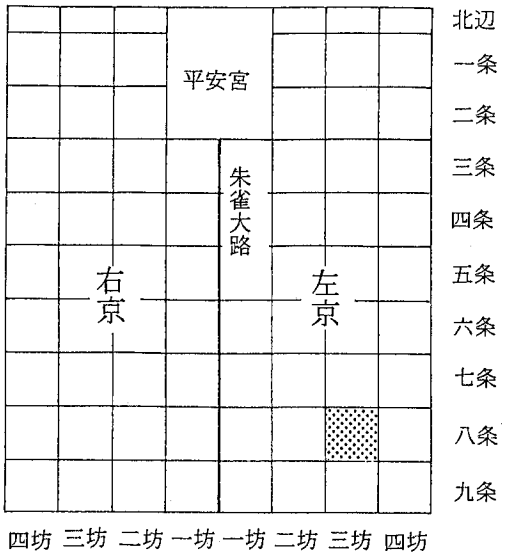
これまでの八条院町の西側の調査（中央郵便局南側やその北側の調査）では、金属加工（鍛冶）関係の跡や鋳型などが数多く発見されていますが、今回は見られません。これは、町の中が職業によって住み分けていた為と考えられます。

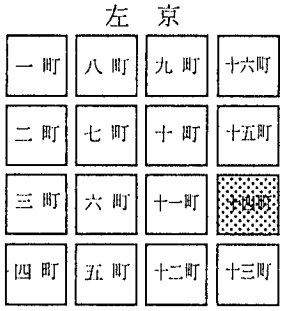
町屋の裏側には漆器や箸・土師器などを大量に埋めた穴が多数ありました。出土した器は完形のものが多く、きちんと順序よく埋められており、単なる生活のゴミではなく、特別の行事などに使われたことが想像できます。漆器には、椀や皿・卓などがあり、大半が内外面黒色で、朱漆で植物や動物の絵を描いたものもあります。全部で100点以上発見し、この時期のものとしては京都市内で最も多く、当時の生活を知る上で貴重な資料となりました。

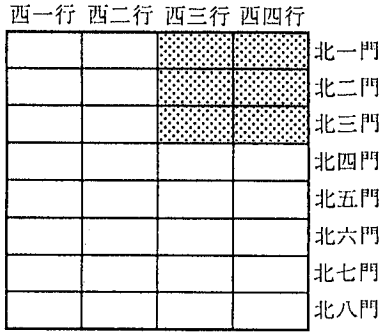

0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000
弥生時代
古墳時代
飛鳥時代
奈良
長岡
平安時代
鎌倉時代
室町時代
桃山
江戸時代
明治
大正
昭和
平成
710平城京遷都
784長岡京遷都
794平安京遷都
1017藤原道長太政大臣になる
1086白河上皇院政を開始
1192鎌倉に幕府を開く
1333鎌倉幕府滅ぶ
1338室町幕府開始
1467応仁の乱起こる
1573室町幕府滅ぶ
1590豊臣秀吉全国統一
1603江戸幕府を開く
1868明治維新
○
1000
周辺は湿地で、条坊は造られていない
この頃、周辺が整地される
1100
この頃、藤原顕隆・美福門院の邸宅できる
平安後期
この頃、暐子内親王（八条女院）八条東洞院邸を伝領
1192
鎌倉前期
鎌倉後期
1313年後宇多上皇八条院町を東寺に施入
この頃、八条院町が栄える
1338
室町前期
この頃、八条院町は衰退し、農村となる
室町後期
明応元年(1492)には町は無い
1573
安土桃山
天正19年(1591)豊臣秀吉によって御土居が築かれる
江戸
東塩小路村となる
明治
明治10年(1877)七条停車場（京都駅）造られる

日本の歴史と八条院町

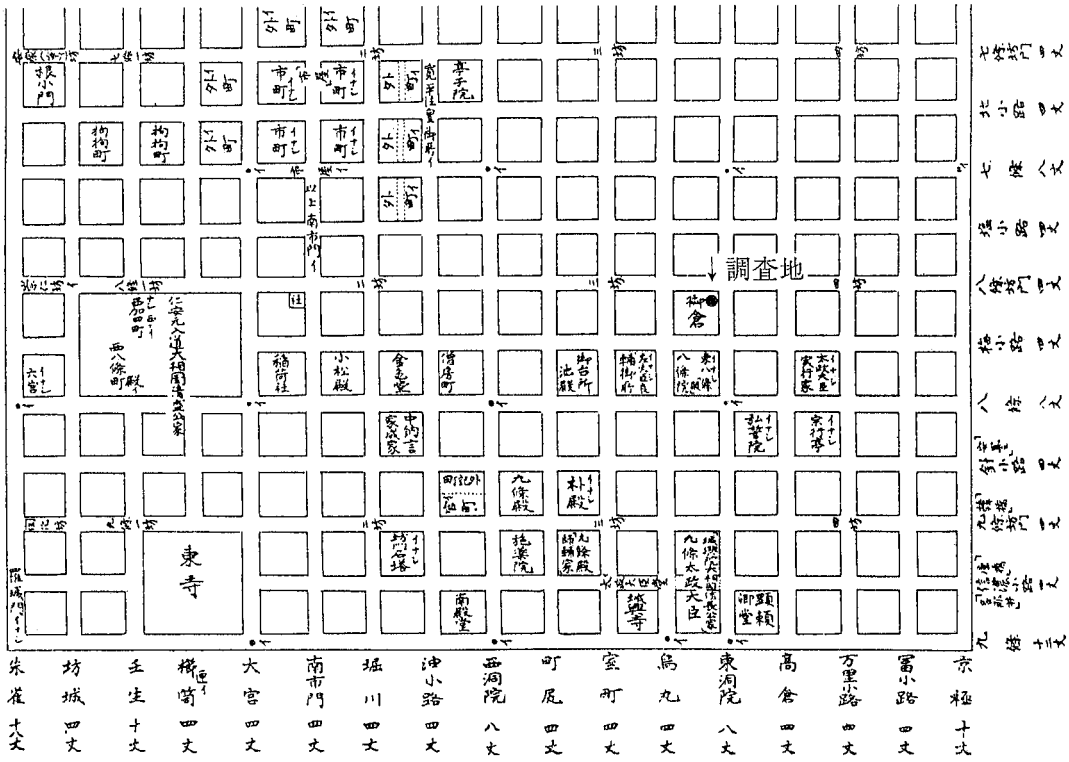

四坊 三坊 二坊 一坊 一坊 二坊 三坊 四坊
北辺
一条
二条
三条
四条
五条
六条
七条
八条
九条
平安宮
右京
左京
西市
東市
西寺
東寺
調査地
一条大路
正親町小路
土御門大路
万里小路
近衛大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
三条大路
六角小路
四条坊門小路
錦小路
四条大路
楼小路
五条坊門小路
高辻小路
五条大路
樋口小路
六条坊門小路
猪熊小路
六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
坂小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
唐橋小路
九条大路
東京極大路
富小路
万里小路
高倉小路
東洞院大路
烏丸小路
室町小路
町尻小路
西洞院大路
油小路
堀川小路
猪隈小路
大宮大路
酒蔵小路
壬生大路
坊城小路
朱雀大路
西坊城小路
皇嘉門大路
西洞院小路
西堀川小路
野寺小路
道祖大路
宇多小路
馬代小路
思止利小路
木辻大路
高倉小路
山小路
無憂小路
西京極大路


平安宮
朱雀大路
右京
左京
北辺
一条
二条
三条
四条
五条
六条
七条
八条
九条
四坊 三坊 二坊 一坊 一坊 二坊 三坊 四坊


左 京
一町
八町
九町
十六町
二町
七町
十町
十五町
三町
六町
十一町
十四町
四町
五町
十二町
十三町

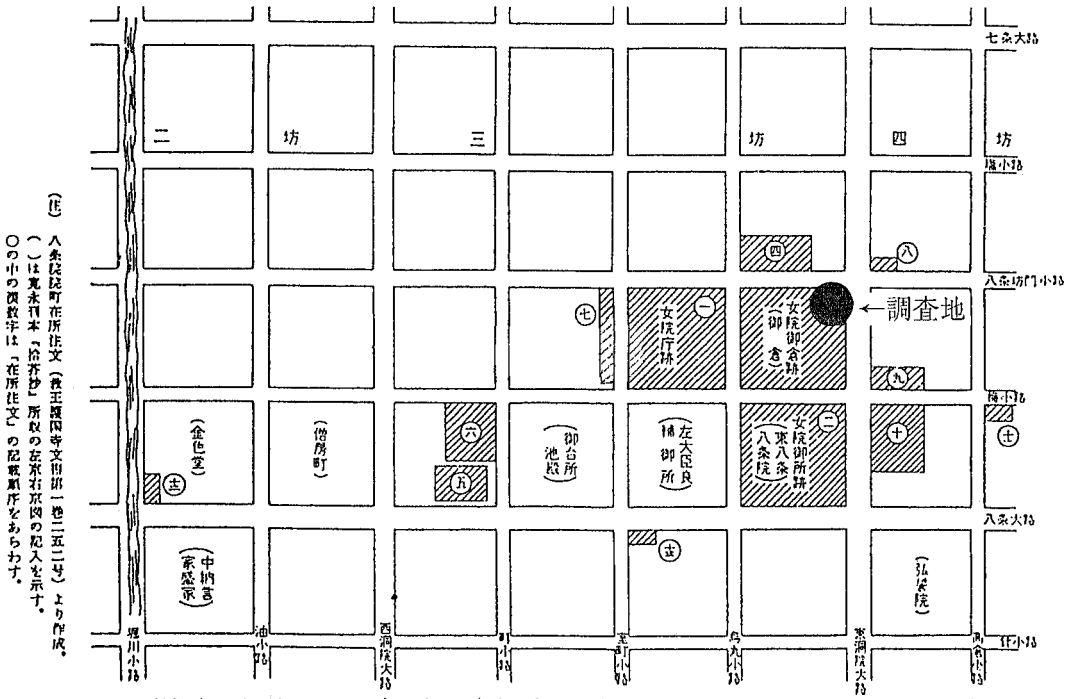

西一行 西二行 西三行 西四行
北一門
北二門
北三門
北四門
北五門
北六門
北七門
北八門

平安京のようす



平安時代後期のようす

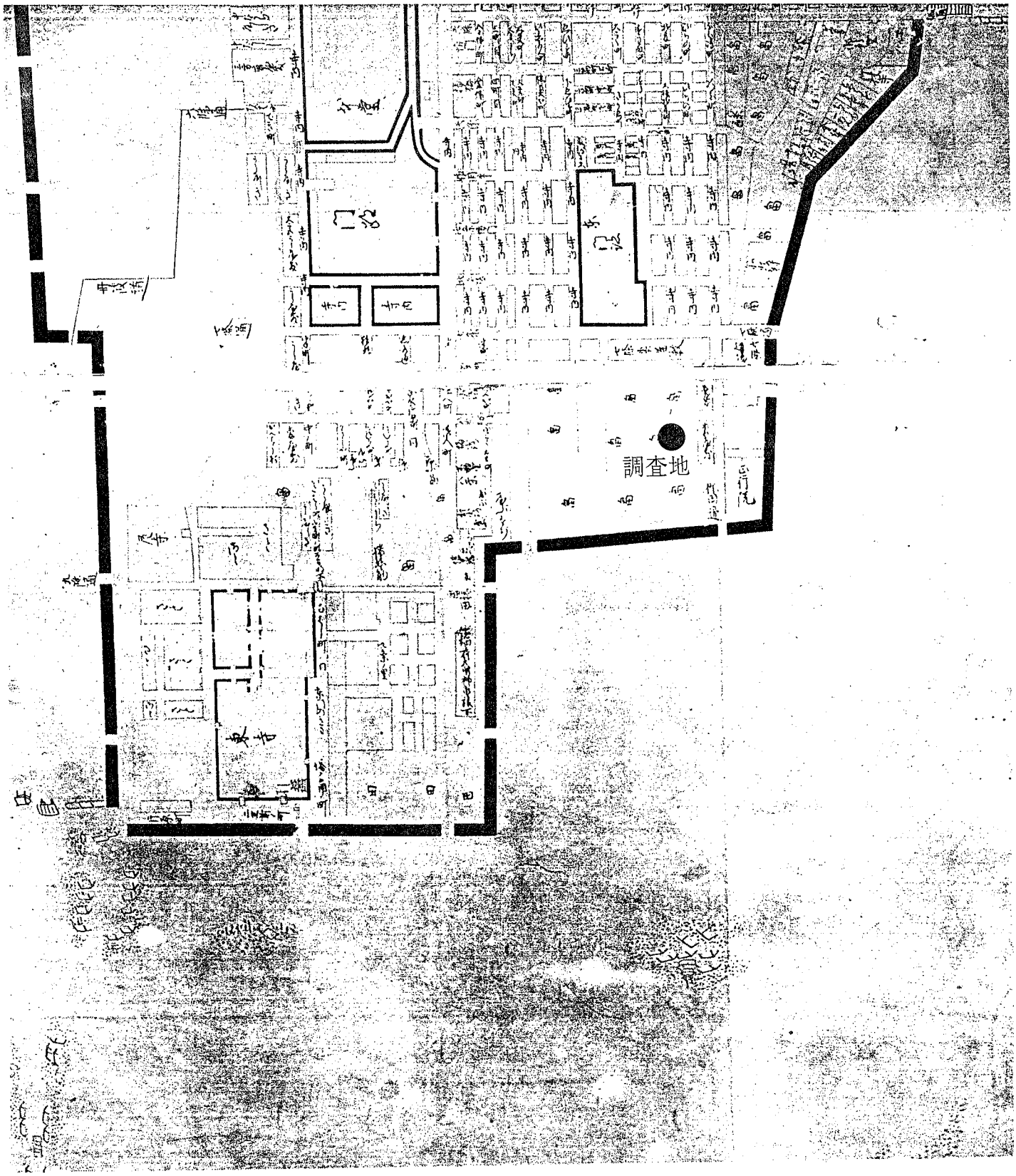
（『拾芥抄』京程図による）



（注）八条院院町在所注文（養王護国寺文書第一巻二五二号）より作成。
（　）は寛永刊本「拾芥抄」所収の左京右京図の記入を示す。
○の中の漢数字は「在所注文」の記載順序をあらわす。

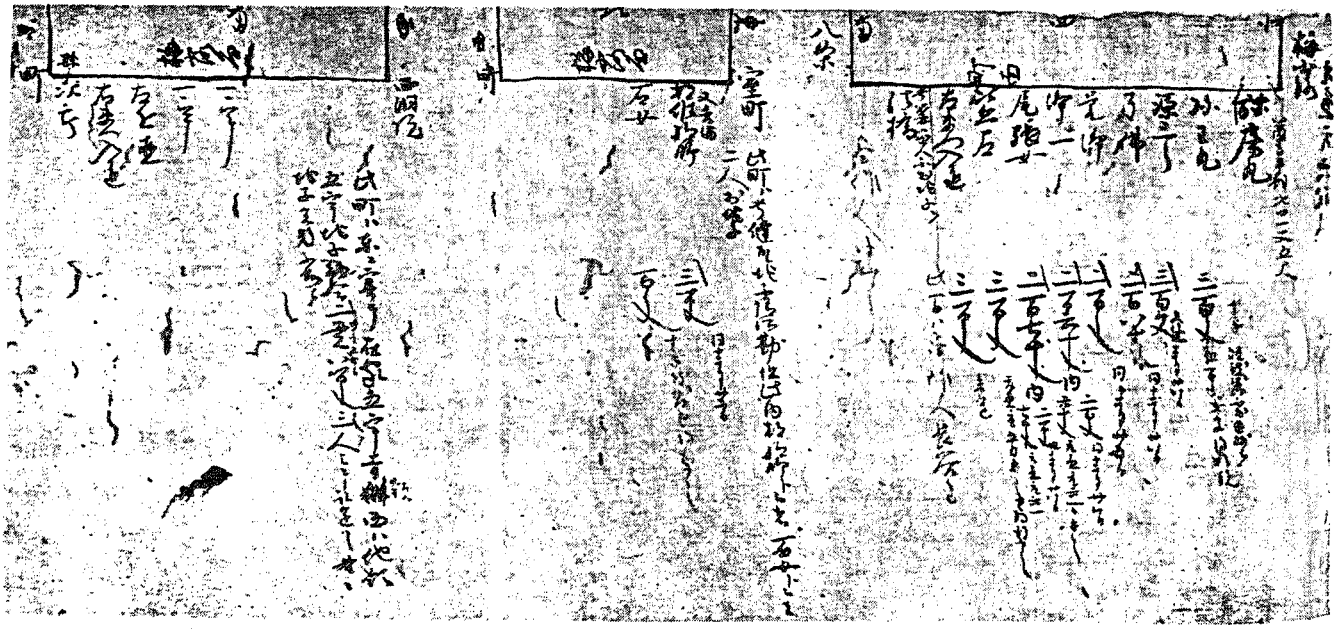
鎌倉時代のようす（東寺に施入した頃の八条院町）

（仲村研「八条院町の成立と展開」による）



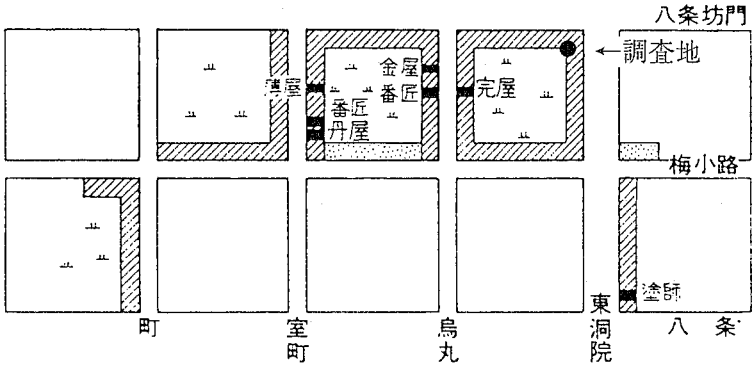
江戸時代のようす

（『京都図屏風』による）



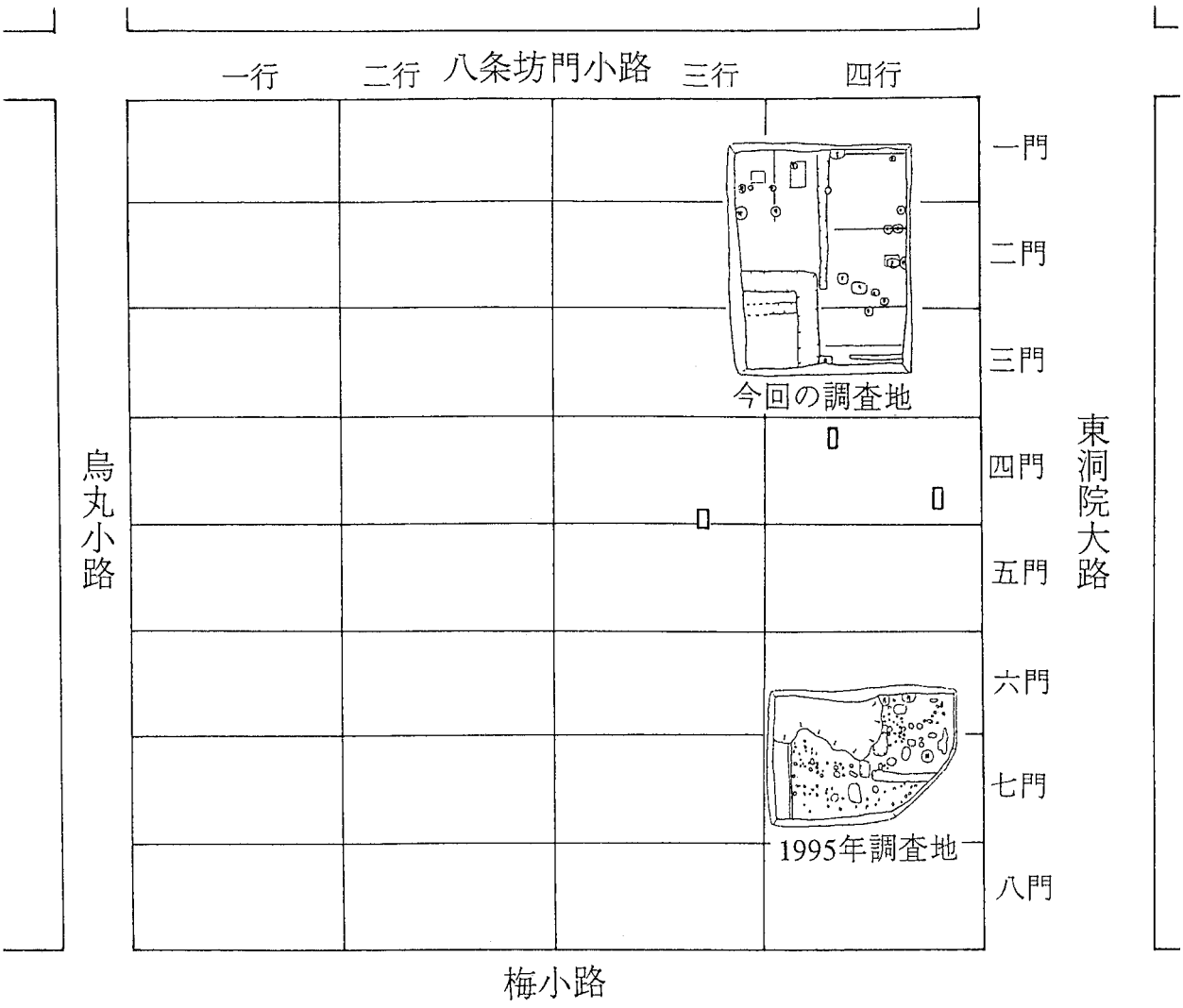
東寺が八条院町の年貢を記録した文書

（『東寺百合合文書展』による）

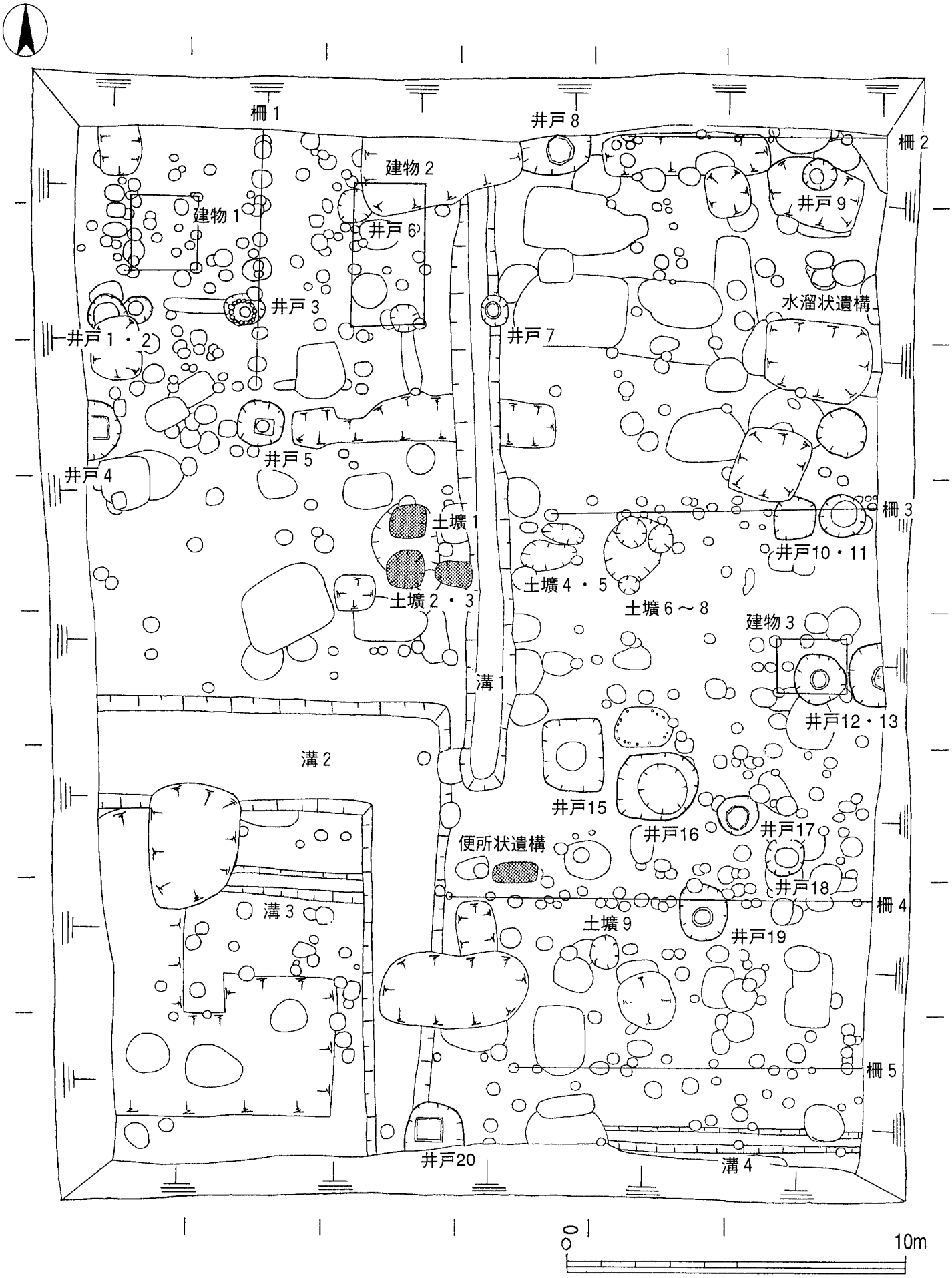


八条院町を古文書から復原する

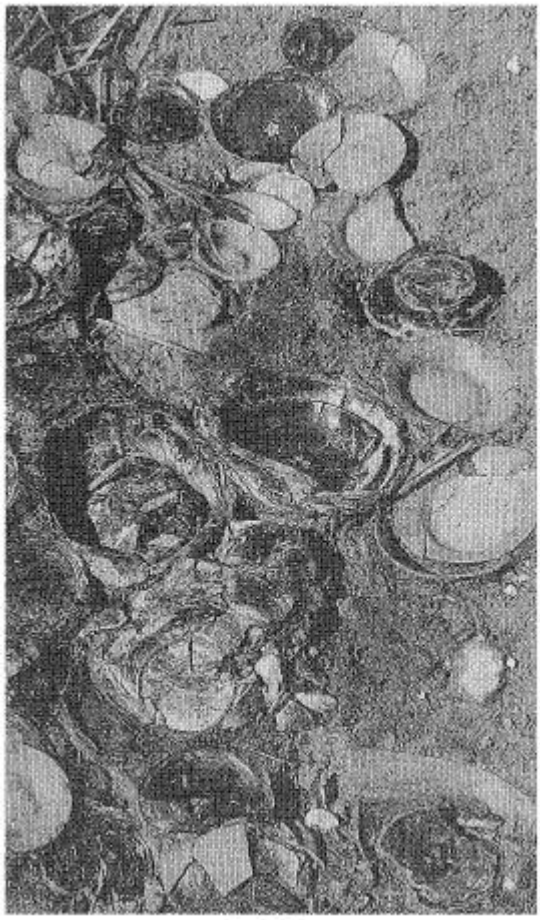
（『京都の歴史』第２巻）



調査地とその周辺のようす

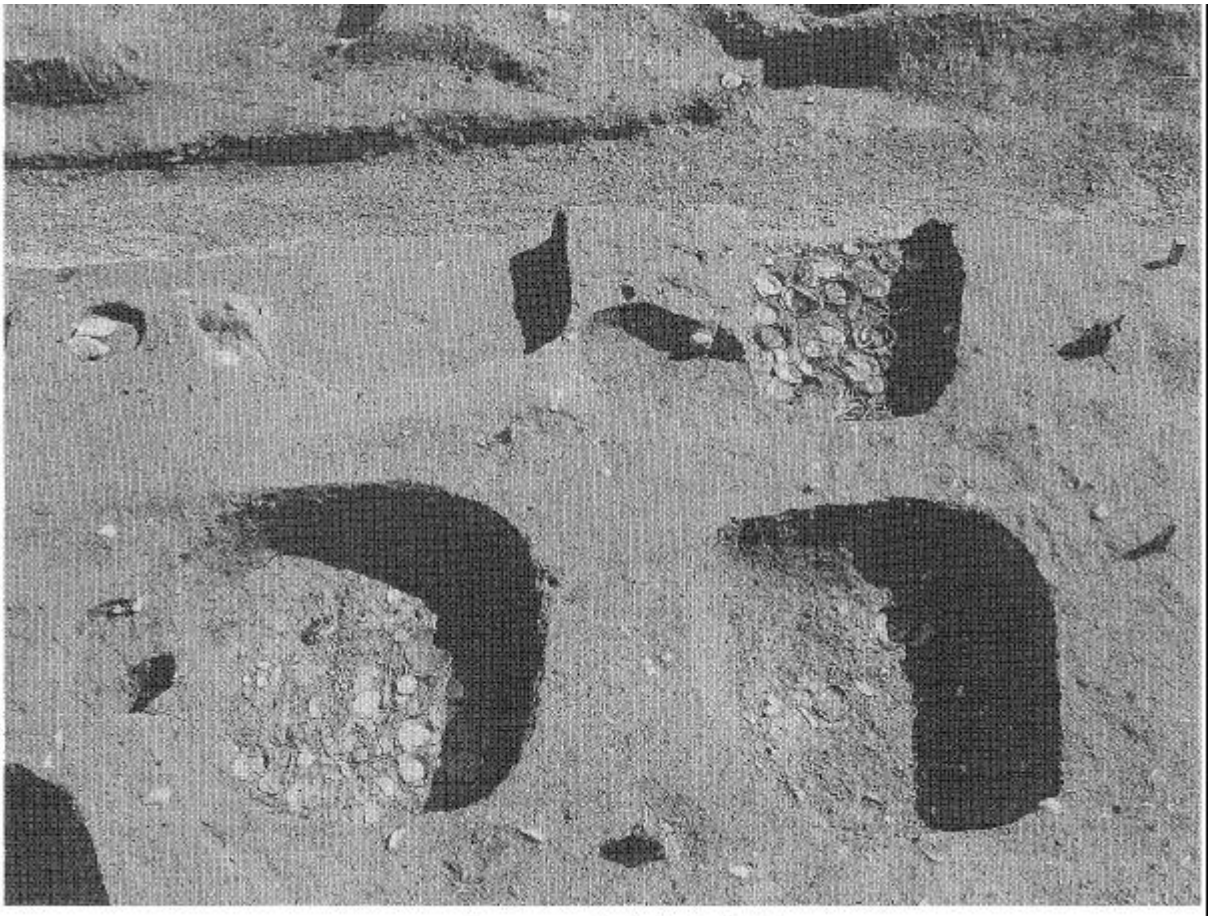


調査地のようす（鎌倉時代から室町時代）（1：150）



土壙 3

土壙 3



土壙 1 ～ 3 遺物出土状況